発達理論の学び舎

Back Number: Vol 297

Website:「発達理論の学び舎」

No.725 夕日の羽_A Feather of the Setting Sun

© YOHEI KATO 2020

目次

5921. 仮眠中のビジョン:創作と愛

5922. 中世の城と井筒俊彦先生の書斎に関する夢

5923. 内的色彩世界を豊かにしていくこと

5924. 今朝方の夢

5925. 仮眠中のビジョン:美的体験としての作品解釈

5926. 時間意識が縮小した現代人

5927. 今朝方の夢

5928. ヨーロッパ的なものが滲入する内面世界:連続的な豊かな時間の流れの中で

5929. 大学入試と時間を止める術に関する夢

5930. 実践美学の始まり

5931. 光の中で光として生きること

5932. 今朝方のビジョンと夢

5933. 現代社会の宿痾に対して

5934. 実践霊性学・インドの修行者サドゥ・感情や観念の沸騰

5935. 秋の講演会と一時帰国に向けて

5936. 今朝方の印象的な夢

5937. 現代の不穏なリズムと自己に固有のリズム

5938. 今朝方の夢

5939. オランダのコロナの状況:今朝方の夢の続きと「喜びの丘」

5940. 今朝方の夢

5921. 仮眠中のビジョン：創作と愛

時刻は午後7時半を迎えようとしている。つい今し方夕食を摂り終え、再び書斎に戻ってきた。今日は夕方から薄い雲が空を覆い始め、今もそのような状態が続いている。そのため、今日は夕日を拝むことができない。

振り返ってみれば、今日もとても充実した1日だった。創作活動に没頭し、読書にも取り掛かることができた。日毎に自分が前進している様子がわかる。平穏さの中で、絶えず集中力を持ってゆっくりと進んでいくこと。明日からの新たな週もそうしたあり方で過ごしていく。

今日は午後の仮眠中に不思議なビジョンを知覚していた。私は迷路のようなダンジョンの中にいて、そこで黒い折り紙のような、いや布のようなものが鳥の形になっているのを目撃した。それは何羽かいて、別にこちらに危害を加えるような様子もなかった。黒い鳥のようなそれらはゆったりと揺らめていていた。そんなビジョンを見ていた。

今日もふと、自分固有の美的感覚を涵養していくことの大切さについて考えていた。日々の取り組みは、それにつながる道である。あるいは、そうした取り組みそのものが道であるとさえ言えるかもしれない。

明日からの新たな週では、オンラインミーティングは今のところ2件だけであるから、秋の講演会に向けた資料作りに力を入れていこう。現在、いくつかの参考文献を読み進めており、そこから観点をいくらか抽出して資料を作っていこう。久しぶりにPPTの資料を作ることもあり、そのプロセスそのものを楽しんでいこう。創作活動の根幹には、常にこうした楽しさの感情があることが健全だ。

今日はこれから、明日の作曲実践に向けた曲の原型モデルを作っていく。こちらも毎日少しずつ進んでいる。作曲理論書の譜例を参考にしながら曲を作る実践と共に、どちらも緩やかだが着実に進んでいる。こうした緩やかな進行こそが発達の道である。

創作活動と創作対象への愛。それが自分の創作を前に進めていき、深めていく。そのようなことを今日も思った。愛というものがいかなるものなのか、その働きにはどのようなものがあるのか。そのあたりも自分にとって大切なテーマになってきている。今、新たなテーマが浮上し始めていることも

きっと何かの縁であり、何かの導きなのだろう。それら全てに感謝して、自分は自分にできることをゆっくりと前に進めていこう。フローニンゲン：2020/6/21（日）19:31

5922. 中世の城と井筒俊彦先生の書斎に関する夢

時刻は午前6時を迎えた。もうこの時間は辺りはすっかり明るくなっていて、朝日も昇っている。赤レンガの家々の屋根を照らす光はとても美しい。

新たな週の到来を祝ってか、小鳥たちも普段以上に元気に鳴き声を上げている。今日は午前中に1件ほどオンラインミーティングがある。それ以外には特に何もないので、創作活動と読書に励んでいこう。読書に関して言えば、今日は今道友信先生の『美について』という書籍を再読しようと思う。数日かけてその再読が終われば、今度は先生の『愛について』を読み返そう。それらの書籍を読むことは、秋の講演会に向けての準備となる。

今朝方は起床前に夢を見ていた。夢の中で私は中世の城のような建物の中にいた。その建物には部屋がたくさんあり、またなんと列車の車両のようなものもあった。私はその建物の中の止まった列車の中にいた。そこでは、当時の服装をした人たちが何人もいた。彼らは軒並み欧米人だが、彼らの話している声は日本語として理解された。彼らの話から推察すると、どうやらこれから戦争が始まるようだった。城の中にはすでに雇われ兵がたくさんいた。

車両の中では、王子のような格好をした人物がいて、彼が車両から飛び出して反対側にあるバスに乗り込み、爆発物か何かのスイッチを止めるミッションを遂行しようとしていた。バスの中には姫のような人物もいて、彼女がミッション開始から爆発物のスイッチを止める時間を計算し、それは9.4秒であった。それを聞いた王子のような人物は、十分な時間だと判断した。彼の機敏な動きを持ってすれば、7秒ほどでそれを止めることができると踏んでおり、9.4秒というのは十分すぎる時間だった。

いざミッションが始まると、バスから降りてくる人たちが続々といて、彼はミッションの遂行がしずらそうだったが、列車の車両から素早くバスに飛び乗り、見事に爆発物のスイッチを止めた。それを見届けると、私の意識は実際に通っていた中学校にあった。校舎の周りは水で浸水し切っており、校舎のそばには見慣れない家屋がたくさんあった。その家屋に戦争の相手方が潜んでいて、こちらを

攻撃しようとしていた。こちら側の雇われ兵は精鋭部隊であり、みんな戦闘能力がとても高かった。一方、相手型の傭兵は単なる雇われ兵であり、士気も技術もどちらも共に低そうであった。

校舎の周りの水に腰まで浸けながら歩みを進めていくと、家屋から銃弾が飛んできた。しかし私たちはそれを気にかけることなく、また相手に攻撃することもなく、素通りする形で先に進んだ。すると再び私の意識は、城の中の列車の中にあった。先ほども列車の中の時間の流れが緩やかだと思っており、またミッション遂行の前には時間が止まっていたのだが、今度は完全に時間が止まっているようだった。止まった空間の中で、列車の中を見て歩くと、どうやらが襲撃があったようだった。残念ながら、城の中の何人かの人が殺されてしまっているようだった。

ふと気づくと、私は言語哲学者の井筒俊彦先生の書斎の中にいた。そこには大量の蔵書があった。先生はすでにこの世を去っているが、ご家族が今も先生の書斎を当時のままに保存しているようだった。私は書斎の中を案内していただき、書斎の本を自由に閲覧してもいいという許可を得たので、早速本棚から1冊の書籍を手に取ってみた。それは先生が論文を執筆する際に核としていた書籍らしく、細かな書き込みがびっしりとなされていた。巻末の検索のところには、ページ数の漏れたものについて逐一該当ページが記載されていた。

書物の中に書き込まれた文字や図を見ていると、これが碩学の書物との向き合い方なのかと多いに感銘を受けた。私は書籍の真ん中あたりに書き込まれていた図に関心を示し、それを見て閃いたことを呟いていると、書斎のドアの付近にいたご家族の方は「何のことやらさっぱり」という不思議そうな表情を浮かべていた。

最後に私は、一冊ばかり本棚の書籍をもらえることになったので、何がいいかと思案していたところ、過去の宗教家や哲学者などの名言集が気になり、それをいただこうかと思った。その書籍の巻末を見ると、出版年は1990年とのことであり、本棚にある書籍の中ではかなり新しいものだった。フローニンゲン：2020/6/22（月）06:35

5923. 内的色彩世界を豊かにしていくこと

時刻は午後7時を迎えた。今、燦然と輝く夕日が西の空に浮かんでいる。

今日は清々しい1日であり、とても爽やかな気分にさせてくれる1日だった。もうすぐ7月を迎えようとしているが、フローニンゲンはまだまだ涼しい。もちろん、最近は日中の買い物には半袖で出かけるようになったが、朝は冷える。今週末には一時的に気温が30度近くになる日があるようだ。フローニンゲンにも本格的な夏がやってくるのは間もなくだ。

今日も1日を通して創作活動に打ち込み、午前中にはオンラインミーティングが1件ほどあった。そうした活動に加えて、今日から再び、今道友信先生の『美について』という書籍を読み進めている。これは秋の講演会に向けた資料作りとして読み返しているのだが、何度読み返しても本書からは新しいことが得られる。本書を読むのは今回で4度目だ。

読むたびごとに新たな気づきや発見をもたらされているのは、自分自身が変化しているからなのだろう。良書を繰り返し読むことを通じて、自分自身の変化に気づかせてもらっている。そのようなことを改めて実感した。本書を再読したら、同じく今道先生の『愛について』と『美について考えるために：実践美学とカロノロジー』を読み返そうと思う。必要に応じて、先生のその他の書籍である『美の存立と位相』などを読み返していこう。秋の講演会までまだ時間があるので、想定している参考文献をできるだけ繰り返し読み返していきたい。

午前中に絵を描いているときに、今後はより自分の内側の多様な色に着目していこうと思った。自分の内側には、まだ気づけていない色彩豊かな世界が広がっている。そうした世界を発見し、開拓していくために、絵を描く際には普段使わない色を眺めてみて、それが自分の内的感覚に合致するようであれば使ってみることにしよう。そうした形で絵を描いていけば、徐々に自分の内側の色の世界が開かれていくだろう。色彩感覚を涵養し、自分の内側の色彩世界をより彩り豊かに育んでいく。そのようなことを思った。

それでは今から、明日の作曲実践に向けて何曲か曲の原型モデルを作っていこう。それが終わればメールに返信をし、少しばかり話しておきたいテーマがあるので、それを音声ファイルにして、「一瞬一生の会」のドライブ上にアップしておこうと思う。

西の空に浮かぶ夕日のように、今日もまた輝くように充実した1日だった。明日もまたそのような1日になるだろう。フローニンゲン：2020/6/22（月）19:28

5924. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今朝方目覚めた時には、寝室から赤紫色に輝く朝焼けを見た。遠方に見える教会が朝焼けに包まれている姿はとても美しかった。今この瞬間は朝日がさらに昇り始めており、赤レンガの家々が黄金色に照らされている。今は風がほとんどなく、外の世界はとても涼しい。

明日から数日間ほど気温が上がるようだが、来週からはまた最高気温が20度前半の気温になるようだ。最低気温も10度前半のため、まだ清々しい日が続く。来月末に訪れるアテネは、この時期は雨がほとんど降らず、そして気温も高い。今週末からは軒並み最高気温が30度を超え、最低気温が20度前半とのことである。感覚としては、アテネの最高気温がフローニンゲンの最高気温の感じである。

早朝の青空を眺めながら、今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、見慣れないレストランの中にいた。そこは間違いなく外国であった。日本でもオランダでもない国のレストランに私はいて、店員や客とある話題について話し合っていた。それはレストランのトイレで起こった殺人事件に関するものだ。私たちは犯人を捕まえるために色々と話し合っていた。

容疑者が数名ほど現れ、そこから犯人を特定していくに際して、どういうわけかクイズゲームのような形式が採用された。そこからの展開は早く、犯人はあっけなく特定され、その人物は逮捕された。その時に不思議だったのは、容疑者の数名たちの大半は移民受け入れの申請をしており、ちょうどその場で発表があったことである。つまり、犯人か否かの判定と移民審査の双方がその場で同時に行われていたのである。移民申請をした全ての人が許可されたわけではなく、むしろ数名しか移民申請が受諾されなかった。そこで次の夢の場面に変わった。

次の夢の場面で私は、信号機が比較的少ない道路の上を車で走っていた。その車は、赤いフェラーリだった。私の前にも一台のフェラーリが走っていた。私はその車に追いつき、少し遠慮がちに追い越しをすることにした。前の車の運転手は若い男性であり、メガネをかけていて、風貌は不良風で細身であった。前のフェラーリを追い越すと、その車は今度は私の車を追いかけるようにして速度を上げ始めた。ある信号機で捕まった時、どういうわけか、車内にいたままにして後ろのフェ

ラーリの運転手と話をすることができた。同じ色で同じモデルのため、思いがけず話が盛り上がった。

私はそれを新車で60万円ほどで購入したことを伝えると、彼は中古で50万円ほどでそれを入手したとのことだった。そもそもフェラーリがそのような金額で買えることがおかしく思ったが、新車と中古の価格がさほど変わらないことにも驚いた。

そこから私たちはまた走り始め、しばらくすると、今度は少しモデルの違うフェラーリが前を走っていることに気づいた。そのフェラーリが公園の中に入っていったのでついていってみると、公園の真ん中で停車した車から私の知り合いが降りてきた。彼は私に手を振り、挨拶をしてきた。私も挨拶を返し、彼の車の運転席を見ると、運転席の窓ガラスが半透明になっていて、パソコンのデスクトップ画面が表示されていた。そしてそこにはPPTが立ち上げられており、どうやら彼は運転をしながら仕事をしていたようだった。

今朝方はそのような夢を見ていた。実際のところは、もう少し細かな場面があったように思う。特に、最初の夢に関しては色々と細かく、複雑な夢の場面があったことが感覚として残っている。フローニンゲン：2020/6/23（火）06:30

5925. 仮眠中のビジョン：美的体験としての作品解釈

時刻は午後7時半に近づいている。今、爽やかなそよ風がフローニンゲンの街を吹き抜けている。そして、優しげな夕日が西の空に浮かんでいる。今日は1日を通して天気が良く、気分はとても爽快だった。明日もまた今日と同じような天気になるらしい。天気の恵みに本当に感謝をしたい。日々の生活の中で感謝の念を捧げる対象がたくさんあるということ。それは幸福の証なのだろう。

雲ひとつない夕焼け空を鳥たちが楽しげに舞っている。自分はあのように物理世界を飛ぶことはできないが、鳥たちと同じ気持ちで認識世界の大空を飛ぶことができる。今の自分はまさにそれを行っている。

午後に仮眠を取っている最中にビジョンを見た。そこには、ヨーロッパのどこかの国の、時計塔のある大学で講演会を実施している自分の姿が映し出されていた。いや、仮眠中の自分はビジョンを眺

める者としていたのではなく、ビジョンの中にいた。その大学は歴史があり、厳かな雰囲気を発していた。講演会を行う予定の歴史ある建物を前にしたとき、とても感慨深い思いになった。

建物の中に入ろうとしたところ、小中高時代の女性友達(EN)が現れ、私に声をかけてきた。どうやら彼女は自分の講演会に参加してくれるらしかった。そのようなビジョンから目覚めた時、数分ほど私はベッドの上に横たわっていて、天井を眺めながらぼんやりと何かを考えていた。そして寝室の向こう側の世界を眺め、再び書斎に向かった。

夕方にふと、芸術作品を味わうという限りにおいて、作品解釈は一つの美的体験になりうるということについて考えていた。作品を理性の働きによって解釈する過程の中にも美的体験が内包されており、それに認識の光を当てていくこと。そうすれば、作品解釈が単なる知的な営みに終わるのではなく、それを超えてより現象学的な美的体験に昇華されていく。そうした形での作品解釈をこれからも行っていこう。これから行う曲の原型モデルの作成の際にも、作品解釈に類することを無意識的に行っている。それをより意識的に行うことによって、原型モデルの作成そのものも美的体験に変容させてしまおう。

言葉･音･絵を通じて、内的感覚の園を作っていく営み。それは明日もまた続いていく。これから生涯を閉じるまでにそれを継続していけば、いかような園が生み出されるのだろうか。そこに憩いはあるだろうか。人々の心と魂が安らぐ園を生み出すことができるだろうか。そのようなことをぼんやりと考えさせてくれる黄昏時が目の前に広がっている。フローニンゲン:2020/6/23(火)19:32

5926. 時間意識が縮小した現代人

時刻は5時半を迎えた。今朝は起床した瞬間に、1羽の鳥が澄み渡る鳴き声を上げていた。清澄な鳴き声との遭遇によって始まった1日。そんな幸運な1日がこれから本格的に動き出していく。

ここ数日間は天気が良く、今日も快晴のようだ。今の時間帯は雲ひとつない快晴の空が広がっている。明日明後日も晴れのようであり、近所のスーパーに出かけるのは明日、街の中心部のオーガニックスーパーに出かけるのは明後日にしようかと思っている。今日から金曜日にかけて気温が上がり、金曜日には最高気温が30度にも達するようだ。しかしそこから気温が再び下がり、来週の初旬には最高気温が再び20度を下回る。

気温がうねりを上げて動いており、地球の生命運動を感じる。それは、「気韻生動」という言葉で表されるだろうか。宇宙の精気が生き生きと響き踊る様子が見て取れる。そしてそれを感じ取ることができる。自分はこれを言葉･音･絵として形にしていこう。

昨日、今道友信先生の『美について』の4読目を終えた。そこから『愛について』という書籍を読み始めた。こちらについて言えば、今回が2読目である。後者の書籍を読み進める中で、今道先生が大変興味深い指摘をしていた。それは、人間の時間性としての意識が縮小してしまったことが、愛の縮小、そして愛の喪失につながってしまっているのではないかという指摘である。

時間的ゆとりを忘れ、細切れの時間によって分断されてしまった時間意識が、人間存在をより小さなものにしてしまっているというのは、強く実感の伴うものである。とりわけ都市型生活を営んでいる現代人にその傾向が強く、毎年日本に一時帰国し、大きな都市に立ち寄るたびにそれを感じる。

人間性の回復としての愛の復権の前に、この時間意識をなんとかする必要があるのかもしれない。音楽は時間と密接に関わっているものであり、自分としては、音楽を通じて時間性の回復に寄与していく道を探りたい。絵画はどちらかというと空間的なものであるが、詩も時間性に根ざしたものであることを考えると、言語芸術的な観点で時間性の復権に関与していく道もありそうだ。

無風の世界に朝日が燦々と照り始めた。どことなしか、朝日に照らされ始めた赤レンガの家々が喜んでいるように思える。彼らの喜びをさらに深めるために、小鳥たちが鳴き声を上げているように聞こえてくる。世界は本来、こうした協力関係で成り立っており、お互いがお互いを深め合い、高め合うような場所なのではないだろうか。フローニンゲン：2020/6/24（水）06:09

5927. 今朝方の夢

書斎の解き放たれた窓からは小鳥たちのさえずりが聞こえてきて、寝室の解き放たれた窓からは、少し大きな鳥の鳴き声が聞こえてくる。彼らの鳴き声に耳を澄ませていると、自分の意識は拡張し、意識は無限の空間に解き放たれていく。

今日も平穏な意識状態と拡張した意識を通じて自分の取り組みに従事していこう。創作活動については12~13時間程度、読書については2~3時間程度になるだろうか。それくらいの活動時間であ

れば全く無理がなく、日々コンスタントにそうした活動を続けていける。十分に活動に取り組んだら、今日もいつものように午後9時半には就寝の準備を始めるだろう。

今朝方の夢。夢の中で私は、見慣れない建物の中にいた。そこは学校とオフィスが混じりあったような場所だった。私は1階にいて、トイレを使おうと思った。何やら近くで行われているセミナーか何かに参加する予定になっていて、その前にトイレに行こうと思ったのである。ところがトイレに行くと、トイレが軒並み故障していて、用を足すことができなかった。幸いにも、別に無理に用を足すような状態ではなかったので、私は気にせずトイレを後にした。するとそこに、中学3年性の時にお世話になっていた先生と、前職時代の元上司の男性がいた。

2人は出身大学について話をしていて、元上司は私と同じ大学の経済学部を卒業していた。一方、私の担任だった先生は、京都大学の経済学部を卒業しているとのことだった。先生は当時理科を担当していたため、経済学部を卒業していたというのが驚きであったが、2人の話をそれ以上聞いていられる余裕もなかったので、私はその場を後にした。

外に出てみると、目の前に山道が広がっていた。山道を歩いていると、後ろから話し声が聞こえたので振り返ってみると、そこにはロンドンのある名門サッカーチームのメンバーが数名いた。彼らは今の時代のメンバーではなく、一昔前のそのチームの黄金時代のメンバーだった。彼らはボールを蹴りながら山道を進んでいて、それも1つの練習のように思えた。彼らは私がよくテレビで見ていた選手たちであり、私は往年の名プレーヤーを前にして、感慨深い気持ちに浸っていた。

気がつくと、彼らはもうどこかに消えており、私の足元にはサッカーボールだけがあった。ふと視線を前にやると、そこには小中学校時代の2人の友人がいて、彼らは走りながら後ろを振り返り、こっちにボールを蹴ってくれと合図してきた。私はそれを見て、彼らの走る速度を計算して彼らの頭上を超えて、ちょうど彼らの目の前にボールが落ちるようにキックをした。

するとそこで私の意識は別の場所に飛んでいた。地下の洞窟のような場所に私はいて、そこでは発掘調査のようなものが行われていた。偶然その場には、小中高時代の親友（SI）と予備校時代の友人がいた。そこでふと、この調査に出かけていく前のことが思い出され、調査前の検査がやたらと面

倒だったということを思い出したのである。特に、空のペットボトルの底を押し、特殊な機械の的に空気を当てるというものが厄介であり、何度やってもうまくいかなかった。

いっそのこと、もうそんな検査を受けることなしに地下に入っていこうと思ったぐらいであったが、安全の都合上、必ずその検査をパスしなければならなかった。そんな場面があったことを思い出し、そこからは2人の友人と話をしていた。

予備校時代の友人がふと、私の内面の成熟度合いを年相応だと述べた。私はそれに対して否定もせず、肯定もせずにいた。以前の彼は、私のことを早熟と思っていたらしいのだが、最近その考え方を改めたとのことだった。彼の意見に否定も肯定もしないスタンスでいたが、一言だけ述べようとした時に、もう1人の親友の方が、「この洞窟内でプロジェクトを推進しようとしているのはソシオパスやサイコパスの人間たちだ」ということを述べた。私もその通りだと思い、彼に賛同したところで目が覚めた。フローニンゲン：2020/6/24（水）06:33

5928. ヨーロッパ的なものが滲入する内面世界：連続的な豊かな時間の流れの中で

時刻は午後7時半を迎えようとしている。今、黄昏時の穏やかさが世界を包んでいる。優しげなそよ風が吹き、暖かな夕日が照っている。今日も1日を通してとても清々しかった。季節はまもなく7月を迎えようとしているが、フローニンゲンの夏の快適さには感謝したい。快適であるだけではなく、そこに爽やかさと落ち着きがあること。それがこの地の夏の魅力だと言えるだろう。

今日もまた午後の仮眠中に、印象に残るビジョンを見ていた。私はヨーロッパのどこかの国にいて、河原近くに佇んでいた。そこには美しい草花が咲いていて、私はそれを眺めていた。時間帯は昼であり、昼の太陽の光が優しく自分を包んでいた。近くに知り合いの女性がいたように思う。彼女に話しかけ、いくらか会話をしたところでビジョンから覚めた。確か昨日のビジョンも舞台はヨーロッパだった。自分の内側にヨーロッパ的なものが随分と滲入しているのだと感じさせてくれる。

あともう少ししたらヨーロッパでの生活も5年目に入る。今でも夢やビジョンの世界には日本が舞台になることが多いが、確かにここ最近はヨーロッパ的な場所が舞台に現れることが増えている。これはやはり、自分の内的感覚の変化を表しているのだろうか。おそらくそのように思われる。

今日は改めて、出すもの、つまり生み出すものの質を変えるためには、取り入れるものの質を変えていくことの大切さについて考えていた。心身の次元においてそのようなことを思う。心身をいかような次元に置き、何を取り入れるか。その点に明日からもまた注意深くなっていこう。

日記の執筆は、現代社会において分断されてしまいがちな時間性をつなぎ合わせていくこと。そして、時間の豊かな流れの中に生きることを可能にする。その日に日記を執筆しないことは、自分の内面世界からその日がこぼれ落ちてしまい、時間的断絶が起こってしまう。それは分断された時間意識を強化し、存在的空虚さを引き起こしかねない。

一方で、日記を執筆し続けていくことは、絶えず連続的な時間の中に生きることを意味し、時間意識をより深いものにしてくれる。これは日記を執筆するだけではなく、曲を作ることや絵を描くことにも当てはまる。それらは全て、時間の豊かな流れの中にいることを促すものなのだ。分断化を促す現代社会の中で、私はその潮流に逆らっていこう。決してその潮流に身を委ねてはならない。その流れの終着地点は、人間の疎外なのだから。

人間が人間であることの1つの大切な側面には、連続的な豊かな時間性があるはずだ。それを喪失してはならない。それを守りながらにして絶えずそれを育んでいくこと。明日からもそうした意識を持って日々を過ごしていく。フローニンゲン：2020/6/24（水）19:36

5929. 大学入試と時間を止める術に関する夢

時刻は午前5時半を迎えようとしている。今朝の起床は午前4時半過ぎであり、その時にちょうど朝焼けを拝むことができた。

寝室の窓から遠くの空を眺めた時、地平線上に朝焼けが見えた。その美しさをぼんやりと眺めていた。美しいものは精神を弛緩させ、そこにぼんやりとたたずませてくれる。そのようなことを思った。

今日のフローニンゲンは、最高気温が28度、最低気温が16度とのことだ。今朝方は少し肌寒く、起床した時にはそうした冷たさがあった。明日も今日と同じぐらいに気温が上がるようだが、明後日以降は再び最高気温が20度前後、最低気温が10度前後になる。

平穏な気持ちで満たされている自分が今ここにいる。そして、充実感と幸福感が洋々と広がっている感じがする。平穏さと洋々さ。それが自分を表すのにふさわしい言葉であり、よくよくそれらの言葉を眺めてみれば、自分の名前の二文字が含まれている。

名前通りのあり方を体現している自分がここにいる。名前を通じて生きている自分がここにいる。平穏さが洋々と限りなく広がっていく自己として生きること。今日もそうした生き方をする1日になる。

今朝方の夢。夢の中で私は、中国のどこかの街にいた。そこはまだ発展中の都市であり、高い建物はそれほどなく、むしろ露店が集まっているような場所だった。私は露店を眺めながら歩いていた。すると、小中高と付き合いのある親友（SI）と遭遇した。彼は元々理系なのだが、どういうわけか九州大学の法学部を受験したいとのことだった。私は彼の受験相談に乗っていて、勉強法について話をしていた。彼の受験相談に乗るのはいいものの、最近の自分の成績は波があり、それが気がかりであった。

するとそこで、高校時代の英語の先生が目の前に現れた。その先生はとても小柄なのだが、教え方が上手く、それでいてとても優しい性格を持っていた。先生は笑顔で私に話しかけて来て、話の中で、最近の自分の成績が揺れていることが職員室で話題に上がっているとのことだった。私が目指している大学に入るためには、学校で1番であっても難しいのだが、最近は2番になることが増えていた。

学内の試験は全く重視していない自分にとってはそれはどうでもいいことなのだが、最近は全国模試でも成績が揺れていることは確かに気になる点ではあった。先生はどういうわけか、私を含めて上位3人の成績を平均し、1つのチームとしてはとても良い成績で安定していると述べた。現行の受験制度においてはチームとして受験できるわけではないので、その考え方には意味がないと私は先生に伝えた。露店の電気が灯り始めた様子を見たところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は時間を止める術を使うことができた。その術理をどこで習得したのかはわからない。気がつけばその能力を使うことができた。小中高時代の女性友達と最近知り合ったある女性の方が、時間を止める術について色々と質問して来た。その能力を発揮するためには、まず第三の眼を開く必要があることを伝えた。すると2人は首を傾げていたので、高度な知覚能力に関

する話から始めようと思い、まずは人間誰しもが持つ表象能力について話し始めた。具体的な事物を思い浮かべる表象能力を、色々と具体例を上げながら説明すると、2人はその点については理解できたようだった。そこから高次元の認識能力について話を始めようとしたところで夢から覚めた。フローニンゲン：2020/6/25（木）05:46

5930. 実践美学の始まり

時刻はゆっくりと午後7時を迎えた。つい今し方夕食を摂り終えた。今日は1日を通して気温が高く、最高気温は30度近くになった。フローニンゲンは湿度が高くないこともあり、そうした気温でも清々しさを感じる。

午後に買い物に出かけた時、近所の運河で水遊びをしている人たちの姿を見かけた。運河の水は決して綺麗ではないのだが、彼らが遊ぶ姿はとても楽しげであった。ようやく水の中に入れるほどの季節になったのだと知る。

今日もまた種々雑多なことを考えていた。未知なる自己が出現することへの憧れと、未だかつて現象したことのない美への憧れは似ているのではないか。自分は創作活動に従事しながらにして、未知なる自己を開こうとしていることに気づかされる。未知なる自己への茫漠とした憧憬の念と、まだ見ぬ美の姿への憧憬の念はとても近しい。

今日は午前中に、ここ数年間協働させていただいているあるベンチャーキャピタルさんとのオンラインミーティングがあった。その中で私の方から、美の探究と実践の双方が大切であるということを述べた。それを受けて私自身が、今日という1日の中にどのような美しさがあったのだろうか？何に美しさを感じたのだろうか？そして、自分はどのような美しい行いをしたのだろうか？ということを考えていた。さらには、今日という日において自分は美しいあり方ができていたのだろうかと自問していた。

これらの問いは、今の自分にとってとても大切なように思える。それらの問いに対して答えが窮するというのは、学習捨象であり、実践捨象だったのだ。それは結局、成長捨象･発達捨象とでも呼べるものである。美にまつわる種々の問いを日々投げかけていき、美的感覚と美的判断力を養っていこう。それを継続していくことを通じて、逞ましい美の実践者になっていこう。そもそも、そうした問いを

投げかけることそのものが美の実践でもある。なぜなら、それらの問いのおかげで日常のあり方や見方が変わるのだから。また、それによって世界との関わり方が変わるのだから。

「なぜ生命は存在するのか？」「なぜ人間や社会は発達していくのか？」など、真の領域を起点にしていては扱えない事柄がたくさんある。真には触れられないものがあるということ。その認識を絶えず持ちながら、善や美の領域の探究と実践を進めていこう。

実践的な倫理学と実践的な美学、それに霊性学を日々の探究の根幹に据えていく。そうしたことを思わせてくれる非常に充実した1日だった。こうした充実感の背後には、常に美の光が放射している。フローニンゲン：2020/6/25（木）19:32

5931. 光の中で光として生きること

時刻はゆっくりと午前6時を迎えようとしている。今、天空から朝日が地上に放射している。

放射。そういえば昨日は、磨かれた、そして高められた精神を持つ存在から放射される輝きとしての言葉･音･絵について考えていた。涵養された精神が生み出す言葉･音･絵には光の輝きがあるのだ。それはこの世界に光を与える。

昨日に引き続き、今日もまた気温が上がるらしい。どうやら最高気温は30度近くになるようだ。ところが明日は雷を伴う雨が降り、最高気温は24度ほどであり、そこから1週間は20度を下回るような気温になるとのことである。もう7月を迎えようとしているが、そうした涼しさがある。猛暑よりも過ごしやすいことは間違い無いので、こうした涼しげな状態に感謝をしよう。

嬉しいことに、来月の今頃はアテネにいる。コロナの影響もあって、旅行に行くのは本当に久しぶりである。旅ができることの有り難さをしみじみと実感している。前回の旅から今回の旅にかけて、およそ半年ほど期間が空いている。その間に、自分はおそらく様々なものを内側に堆積させてきたように思う。今回の旅は、そうした堆積物をより高めるためのものになるような気がしている。

アテネで見る諸々の光景は、文字通り、光としての写し絵であり、それは自分の内側に光を与えるだろう。そうなのだ、「観光」とは、「光を観ること」なのだ。アテネの地でいかような光を観ることがで

きるのだろうか。それは自分の中に新たな眼を見開き、そして自分の内側に新たな光をもたらすだろう。そこから放射される自分の言葉･音･絵の誕生を静かに待ちたい。存在の核からの光の全面放射。遍在する光に溶け込み、光として生きること。

そうだ、偶然にも、自分が長く過ごしてきた故郷の町の名前は「光」ではないか。かつて詩人の大岡信は、「土地の名前はたぶん、光でできている」と述べていた。まさに私の故郷は、光から生まれ出たのだと思う。自分は、光の世界の住人だったのだ。

故郷の瀬戸内海が光に照らされて輝いている情景が脳裏に浮かぶ。この時期の瀬戸内海はさぞ美しいに違いない。この秋に一時帰国する際には、秋の瀬戸内海の良さを味わおう。そこにも固有の光があるはずだ。

昨晩、来月末のアテネ旅行の際に何の本を持って行こうかと考えていた。母国以外の国で外出している際に日本語空間に思考が持っていかれると何かと不便のため、日本以外の国への旅行中は和書を読まないようにしている。今回は、美学に関する薄い書籍を持っていくか、音楽理論、特にハーモニーに関する薄い書籍を一冊持っていこうかと考えている。このあたりはまた日が近づいたら考えることにしたい。フローニンゲン：2020/6/26（金）06:06

5932. 今朝方のビジョンと夢

寝室側から差し込む光の美しさ。寝室の窓からは立派な教会の頭が見える。朝日が照らされるときには、いつもそこをぼんやりと眺めている。

今朝方は起床してからしばらくの間、ビジョンを知覚する意識状態にあった。ビジョンを知覚するというのは、明晰夢のような形で、自覚的な意識を持ちながらにして、夢のようなイメージを見ることを指す。書斎にヨガマットを敷いて、その上で目を閉じてヨガをしている最中にビジョンが立ち現れたので、しばらくビジョンを眺めることにしていた。そこにはヨーロッパの街並みが現れたり、1冊の書物が現れた。特に後者に関しては、随分とはっきりとその書物の文章を読むことができていた。ビジョンの中でそれを読んでいる最中には、大きな気づきを得ていたのだが、今となってはその内容がどのようなものだったのかを覚えていない。しかしそれは大して重要なことではない。

自分の無意識が大切な気づきを得たということが重要なのである。そこで得られた気づきは、内的促しを受けて、しかるべき時に顕在意識下での気づきとなって表出してくるだろう。私が行えばいいのは待つことだけである。

午前6時を迎えたフローニンゲンは、すっかり明るい。冬の時代においてはまだまだ真っ暗な時間であり、今このようにして瑞々しい光で満ちているこの世界を前にして、自ずから感動の心が生まれる。ここでも鍵は自ずから性なのだ。そして、自己と世界との照応もまた鍵となる。

今目の前に広がる世界に美を感じたのは、世界との照応があったからのだ。これは感じる美であると同時に、発見する美でもある。感覚的に感じながら、同時に理性的にも把握していく美。感覚と理性の片方ではなく、どちらも総動員した美的感受の運動が自分の内側で起こっていることに気づく。

数羽の鳥たちは大空で、光の海を泳いでいる。近くの街路樹に止まる小鳥たちは、光の海で泳ぐ前に少しそこで休んでいる。安息を醸し出す彼らの鳴き声が聞こえてくる。それは再び特殊な意識状態にいざなってくれるかのようだ。そうした意識状態で今朝方の夢について振り返ろう。

夢の中で私は、ドイツのどこかの街にいた。その街の日本風の居酒屋にいた。時間帯は夕方であり、辺りはゆっくりと薄暗くなってきていた。店内には人がほとんどおらず、私は、一昔前に活躍していた芸能人の女性と知り合いのようであり、その方と他に何名かと一緒に食事をすることになっていた。私はその女性の友人と会話をしており、どうやら最近再婚したらしかった。

再婚のタイミングで前の旦那との間に子供ができたらしく、現在の旦那はその子が自分の子供ではないことを知らないとのことだった。何か複雑な話だなと思っていると、いつの間にやらその店がその女性の自宅になっていた。どのような経緯かは不明だが、私はシャワーを借りることになり、2階のシャワーは旦那さんが使っていたので、私は1階のシャワーを借りることにした。シャワー室に入り、鍵を閉めたところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面については断片的な記憶しかない。私はガラス張りのボックスのような空間にいた。時刻は夜に近づいており、辺りは闇に包まれ始めていた。そのガラス張りのボックスから外を眺めたときに、外に何かあることに気づいた。見ると、テーブルの上に野菜が切って干されていたのであ

る。あれは何かを尋ねようとしたところ、隣に前職時代の会社のトップの方がいて、野菜を干している目的について教えてくれた。その後、仕事の話になったのを覚えている。フローニンゲン:2020/6/26(金)06:33

5933. 現代社会の宿痾に対して

時刻は午後7時を迎えた。今この瞬間の西の空には、穏やかな夕日が輝いている。今日もまた本当に良い天気だった。午後に街の中心部に買い物に出かけた際には、初夏を思わせる暖かさを感じることができた。人々はみんな薄着であり、夏を満喫しているようだった。明日からは再び気温が下がるが、今日の日のように夏を感じられる日が7月からは増えてくるだろう。

昨日に考えていたことを今日もまた考えていた。現代は人間性開発運動に躍起になるよりも、真っ先に人間性回復運動に従事するべきなのではないかという考えが芽生える。成人発達理論やインテグラル理論のような理論もそれを人間性の開発に活用するよりも先に、失われた人間性の回復に向けて活用していくことが優先されるような現代社会の姿が見えてくる。

現代社会において、善や美の領域が集合規模での学習捨象及び実践捨象になってはいやしないだろうかという問いが再び浮かび上がる。それはまさに、ウィルバーが述べたフラットランド現象の象徴である。

ここのところの関心が倫理学や美学に向かっており、とりわけ美学に対する傾斜が強い自分がいる。そうした領域へ自分を向かわせているのは、集合規模での堕落的な流れに逆らおうとする衝動のようなものなのかもしれない。善や美の欠落は、現代社会の宿痾のようにすら見えてくる。そうした持病を抱えた現代社会に対する関与を真剣に考え、それに真っ先に取り組んでいこうとする意識が芽生えている。そしてそれらはもうすでに自分の行動として現れている。

午前中にふと、創作においては、絶えず自己を映し出すものを生み出すという静的な側面がありながらも、同時に、絶えず自己とは異なる何かを映し出すものを生み出すという動的な側面があることに気づいた。創作物は、そうした静と動の相互作用の末に生み出されるものである。であるがゆえに、創作物は生み出されることを通じて自己を育み、そしてまた自己とは違う異質な存在に自己の

目を見開いていく。つまり、創作物は自己を育みながらにして、絶えず異質な存在に自己を出会わせる契機をもたらすものなのである。

今日は昼前に心身が仮眠を必要としていたので、短く仮眠を取った。その際にビジョンが立ち現れ、ロシアの女帝エカテリーナと出会った。彼女と何を話していたのかは覚えていないが、話をしていたのは穏やかな海が見える砂浜の上だった。時刻は仮眠を取っている時と同じ昼の時間帯であり、太陽光が眩しいほどに輝いていた。仮眠中のビジョンは今夜の夢にどのような影響を与えるだろうか？フローニンゲン：2020/6/26（金）19:27

5934. 実践霊性学・インドの修行者サドゥ・感情や観念の沸騰

今朝方はゆったりと午前5時に起床した。起床した私の目に飛び込んできたのは、赤紫色に輝く朝焼けだった。その美しさに思わず息を呑み、しばらく寝室の窓から朝焼けを眺めていた。5時半を迎えた今も朝焼けの名残を残しているが、少々雨雲が見える。雨雲が見えながらにして朝日が照っているという不思議な状態だ。

天気予報を確認すると、今から数時間後に雷を伴う雨が降り始めるようだ。雰囲気からして、その時の雨は激しそうである。

今朝方にふと、「実践霊性学」なるものについて考えていた。倫理学や美学を実践と関連づけて、実践倫理学や実践美学として探究をしていくこと。どちらも共に敬愛する今道友信先生が提唱していたものであり、現在の関心の幾らかはそれらの実践学問に向かっている。

そしてもう1つ自分が関心を持っているのが、実践霊性学とでも呼べるものだ。こちらについては、今朝方ふと言葉が降ってきたものであり、自分が勝手に名付けたものに過ぎない。だが、霊性というものを単に学術的に考察していくだけではなく、それを日々の生活に活かし、実践的な形で展開させていく霊性学があっていいのではないかと思ったのである。いや、むしろ霊性学というのは本来はそういうものであるべきなのではないかと思ったのである。自らの霊性を省み、それを育みながらにして社会に関与していく実践的な霊性学。それを自分なりに探究していこう。

昨日、ある知人の方から執筆した原稿を送ってもらった。その原稿記事が大変興味深かった。それは、生きながらにして死んでいるというインドの修行者サドゥに関するものである。サドゥは、自由を求めるヨガの修行者であり、サドゥになるためには国に死亡届を出す必要があるとのことである。サドゥになってしまえば、サドゥになる前にどのような身分であったかは関係なく、死亡届を出した段階で、カースト制度の枠外に出るとのことである。端的には、その時点で俗世で生きていたことを手放すことになる。そうした点に加えて、サドゥの外見もまた独特であり、体に灰を塗って真っ白にしている。それは、死者であることを意味しているらしい。そんなサドゥに会いにインドまで出かけて行った知人の記事が大変面白かった。

そもそもその方がサドゥに出会ったのは、シヴァ神に関心を持っていたことがきっかけとのことだった。シヴァ神というのは「破壊と再生」を司ることで有名である。実は私は、今から5年前に日本で1年間ほど生活している時にお世話になっていたエネルギーワーカーの方とのセッションの際に、シヴァ神と自分は深い関係にあるというフィードバックを得ていたので、尚更関心を持って記事を読んでいた。

記事を読み進めると、シヴァ神信仰は、生の根源を讃えるということを意味しているらしく、今の自分の日々の取り組みに対する思いと根底でつながるものがあるように思えた。生の根源を讃える形で日記を執筆し、音楽を作り、絵を描くこと。そうした毎日を送っているのだ。

今回の記事がインドについて書かれたものであり、シヴァ神のみならず、実は作曲においても前々からインドには注目していた。インドには、西洋音楽に劣らないほどの音楽理論の緻密な体系があり、インド音楽の独特なメロディーやハーモニーには以前から注目していた。実際に手元にインド音楽に関する専門書が数冊ほどあることも何かの縁だろうか。近い将来にインド訪れることがあるかもしれない。その際には、知人の記事にあったように、ガンジス川沿いにある、ヒンドゥー教の聖地「バラナシ」に足を運んでみることも選択肢に入れておこう。

サドゥの自由なあり方と生き方について考えていると、ベルグソンが述べた自由についてふと思い出した。ベルグソンは、内側に生じる感情や観念の沸騰に身を委ねることを自由の定義とした。言い換えれば、それは生命の躍動に身を委ねることだと言えるだろうか。自分はまさにそうした形で日々を生き、感情や観念の沸騰を絶えず形として表現している。重要な点としては、ベルグソンは

そうした自由というものが体現されるのは、人生における重大な出来事に遭遇した時だとしていることである。つまり、内側に溜め込まれた感情や観念が自由として爆発するのは、内的危機の体験を経てもたらされるということである。

この指摘については、自分自身でも思い当たる体験を過去に何度かしてきた。1つ知覚したビジョンとして忘れらないものがある。オランダに来る前年に日本で生活をしていた時、ある日、地獄の業火でゴキブリのような無数の生物が焼き裂かれるビジョンを仮眠中に見た。そこで焼き裂かれていたのは自我の構成物だったように思う。このビジョン以外にも、思い返せば、感情や観念の沸騰を示唆するような内的体験を何度もしているように思う。それらの体験について思い返しながら昨夜は就寝に向かった。フローニンゲン:2020/6/27(土)06:11

5935. 秋の講演会と一時帰国に向けて

時刻は午前6時を迎えた。遠くの空は明るいが、手前の空には薄い雨雲が見られる。まだ雨は降ってきていないが、おそらくもう少ししたら雷を伴う雨が降りそうな気配である。

今日もまた探究活動と創作活動の両方をゆっくりと進めていく。前者に関していえば、実践倫理学・実践美学・実践霊性学の3つを起点にしていく。そこに群衆心理学を捕捉的に絡めて専門書を読み進めている。実践倫理学については、この秋に日本に一時帰国した際に、今道友信先生のエコエティカに関する書籍を購入しようと思う。それまでは手持ちの書籍を何度も繰り返し読む形で、まずは実践美学と実践霊性学の探究を進めていく。

今日は、この秋に行う対談講演会に向けての準備に力を入れたい。ちょうど明後日、対談相手を務めてくださる画家の方と話をすることになっている。数週間前には顔合わせのオンラインミーティングを行い、今回は対談に向けた資料を作るためのインタビューミーティングとなる。そのインタビューに向けて、今日はその方が出版した書籍と画集を読み、その他にもいただいた資料に再度目を通していこうと思う。そして明日は、それらの資料をもとに、当日のインタビューをどのように進めていくのか、どのようなことを尋ねていくのかの整理をしていこうと思う。

前回のオンラインミーティングでは、お互いの関係者も含めて、様々な人がその場にいたが、今回はゆっくりとお話を聞くために、一対一の形にしてもらった。月曜日のミーティングがとても楽しみで

ある。この秋の一時帰国に際して、その対談講演会が1番の楽しみだと言えるかもしれない。東京での講演会の前には、福井県や石川県に旅行に行くが、それはどこか特定の場所を巡りたいというわけではなく、単に両親の加藤家のそれぞれに縁のある地であり、そうした場所に訪れることによって何か感じられるものがあるのではないかと思ったのである。

仮に具体的に何も感じられなかったとしても、自己の深層部分においては、先祖の何らかの力が自分に働きかけてくれるのではないかと思う。福井に関しては上り藤、石川に関しては下り藤を家紋にした加藤家がある。陰陽のように、加藤家にも2つの側面があることは興味深く、ひょっとすると今回両県に足を運ぶことによって、自分の内側で、これまで未統合であった対極的なものが統合されるかもしれない。そんな期待がほのかにある。

秋の一時帰国に関して1つだけ懸念事項があるとすれば、今のところ、オランダは特別制限国に分類されており、オランダからの帰国者は空港での検査のみならず、2週間ほど空港近くのホテルに滞在することを強制され、その期間は公共交通機関を使えないとのことである。この決まりはまだ効力を発揮しており、それがいつまで続くのか不明である。

今欧州では、空港が開き始め、実際に来月末にはアテネに行けるようになった。そこまで回復し始めているのだが、日本の状況は不透明である。現在のような決まりが緩和され、検査がより速やかに実施され、2週間缶詰にされるのではなく、観察期間という形で過ごすような流れになってほしいと思う。このあたりについても政府の今後の対応を追っていく必要がありそうだ。その対応いかんによって、日本滞在のスケジュールを変更していかなければならない。フローニンゲン：2020/6/27（土）06:29

5936. 今朝方の印象的な夢

時刻は午前7時を迎えた。今はまた晴れた空が戻って来ているが、天気予報によれば、ここから数時間後には雷を伴う雨が降り始めるようだ。現在の静けさはいっときのものなのかもしれない。

今朝方は印象に残る夢をいくつか見ていた。夢の中で私は、実家の目の前にある海岸にいた。その日は天気が良く、太陽の姿を拝むことができたのだが、どういうわけか夢の世界は白黒のようだった。私は友人たちと一緒に海に入っていき、波打ち際で泳いでいた。しばらくそれを楽しんだ後、

一度陸に上がって休憩をした。そこから再び泳ぎに波打ち際に近寄っていくと、巨大な黒い影が海の中に見えた。

浅瀬に浮かぶその黒い影はとても不気味であり、最初私は巨大なサメかと思った。しかしよくよくそれを見てみると、大きなマンボウだった。そのマンボウはとても可愛らしい顔をしており、ゆっくりと泳いでいた。ところが驚いたことに、マンボウが海面から顔を出し、突然宙に浮き始めたのである。

マンボウが宙に浮かぶ様子に私たちは見入っていた。マンボウはしばらく宙に浮かんでいたが、あるところで突然空を飛んで行き、再び海に着水して沖の方へと去って行った。私たちはその光景に唖然としていた。その直後に、海面に同じような背びれを見せる大きな魚たちが現れ、それらもマンボウだったが、中にはサメも混じっているように思えた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、同じく実家の近くの海岸が舞台だった。海岸沿いを歩いていると、ヨットハーバーの近くに高校時代にヨット部に所属していた2人の友人と遭遇した。どうやら春に新入生が入ってくることに伴い、新歓に向けた準備をしているとのことだった。新歓ではヨットの体験ができるとのことであり、私はそれに関心があった。自分も体験させてほしいと彼らに述べると、彼らは一瞬戸惑った表情を見せたが、快諾をしてくれた。

どのような形式でヨットに乗るのかと尋ねたら、「ツヴァイ」だと言われた。その言葉を聞いた時、私の頭には一瞬「?」マークが浮かんだが、ドイツ語のツヴァイは「2」を表すので、2人でヨットに乗る形式なのだろうと推測した。それを体験できる日にちを尋ねたところで、大学一年生の時の第二外国語で同じクラスだった友人たちが続々と姿を現した。彼らと会うのは久しぶりであり、互いの再会を喜んだ。せっかくなので、うちに寄って話でもしていかないかと提案したところ、彼らもそれを喜んでいた。事前に母に確認すると、何も問題ないとのことだったので、人数は多いが、そこから実家に向かうことにした。

すると私の体は別の場所に瞬間移動した。私の体は、幻想的な建物の中庭にあった。そこは中国の城のような場所であり、私はそこの中庭にいた。そしてそこで、友人たちと一緒にサッカーバレーに興じていた。それに興じる前に、一応ルールの確認を友人にしていた。それはノーバウンドでボールを相手に返すのか、それともワンバウンドまで許容されるのかという点である。ノーバウンドで

返さないといけないとのことだったので、プレーの難易度が高いと思った。そこから何人かの友人と一緒に、和気藹々とボールのラリーが始まった。

一度私のところに取りにくいボールがやって来て、私はそれを地面に落としてしまった。どうやらこのゲームでは、2回ほど地面にボールを落としたら、その場から強制退場されるとのことだった。そうしたこともあり、そこからの私はかなり慎重にプレーを進めた。結局私は退場することなく、最後までその場に残っていて、友人の1人がそろそろゲームを止めようと述べた時に、場面が変わった。最後の夢の場面は、1つ前の夢の場面とつながっているようだった。

先ほどサッカーバレーをしていた友人に加えて、何人かの友人たちがその場にいて、これから一緒にガーデンハウスを走り抜ける自転車レースに参加することになっていた。その控え室として、ボルダリングジムのような場所が私たちに与えられていた。扉は閉まっており、中は少々薄暗かった。ボルダリングの壁も薄汚れていて、最初に私たちは掃除をする必要があるのではないかと思ったほどだった。実際に私たちは、近くにあった洗剤とホースを使って壁を少し綺麗にした。

そのようなことをしていると、レースの開始時間が近づいて来ており、私たちは会場に向かって出発した。会場に行くためには、一両編成の外国制の列車に乗る必要があった。列車が到着する時間が迫っていたので、すぐにプラットホームに向かった。プラットホームと言っても特別な場所ではなく、段差も無い場所であり、単に線路に侵入しないように注意すればいいだけの場所だった。

列車の各ドアに対応する形で列になる必要があるらしく、乗客たちは各ドアに応じて一直線に並んでいた。私は左から2番目の列の板の上に並んでいた。列の中でどこまでの乗客が列車に乗れるかは、板の切れ目でわかるようになっていた。列を待つ乗客たちの姿を眺めたところ、東欧系の人たちの姿をちらほら見た。また、家族連れも結構いた。

列に並んだのはいいものの、結局私たちは列車に乗ることをせず、走ってレース会場に向かうことにした。私はみんなとはぐれてしまい、スタート地点がわからず、昨年と同様に、今年もレースに参加できないかもしれないと焦った。去年もスタート地点が不明のまま辞退していたのである。焦りの気持ちを持ってしばらく走っていると、綺麗な花々が植えられた庭が見えて来た。スタート地点はもうすぐそこだと思った。

© YOHEI KATO 2020

その庭の中には、サンフランシスコのような入り組んだ街が含まれていた。その逆ではないことが面白く思えた。つまり、サンフランシスコのような街の中にその庭があったのではなく、その庭の中に複雑に入り組んだ街が含まれていたのである。

スタート地点を目前にして、レースが始まってしまったようだったが、このレースはリレー式であり、私は途中のコースを走ることを任されていたため、なんとかレースに参加できそうだと嬉しくなった。サンフランシスコを象徴するような坂道が庭の中にあり、そこを大学時代のクラスメートの2人が自転車で駆け下りてくる姿は圧巻であり、それはさぞかし爽快だろうと思った。フローニンゲン：2020/6/27（土）07:41

5937. 現代の不穏なリズムと自己に固有のリズム

時刻は午後7時を迎えた。土曜日がゆっくりと終わりに向かっている。

今日は天気予報の通り、午前中と午後に2度ほど雨が降った。しかし思っていたほどの激しい雨ではなかった。雷が伴うという予報であったが、結局雷は鳴らず、突発的に雨が少々降っただけだった。明日からは再び気温が下がるようであり、そこからは7月のフローニンゲンの平均最高気温である20度前後の気温の日が続く。

風もなく、とても穏やかな世界だ。そんな世界を眺めながら、本日考えていたことを振り返っている。1つには、生活拠点が変われば生み出す言葉･音･絵が異なるであろうということだ。今の生活拠点はフローニンゲンだが、どこかのタイミングでまた別の土地に移り住むことになるだろう。そのときに、自分はどのような言葉･音･絵を生み出しているのだろうか。

生活拠点の変更のみならず、それは旅によってももたらされるだろう。来月末のアテネ旅行の最中には、どのような言葉･音･絵が自分の内側から湧き上がってくるのだろうか。きっとそこには、アテネ固有の何かが滲み出ているだろう。

2つ目として、私たち個人は固有のリズム的存在であるということについて考えていた。一人一人が持つ生命のリズム。それは呼吸、生命エネルギー、思考、感覚のリズムとして現れている。人が真に他者に共感する際には、リズムの共鳴現象があるのだろうか。そこから、現代社会が不穏な方向に

動いていることの背景には、集合としてのリズムの乱れがあり、そうした乱れと相まって個人のリズムの乱れがあるのだろうということについて考えていた。文明の習慣的リズムの乱れが個人のリズムを乱し、それがまた文明のリズムの乱れを引き起こしているという双方向的な因果がそこにあるように思える。

そのような状況下で私たち一人一人にできることは何であろうか。1つ目に、自らのリズムの乱れと社会のリズムの乱れに自覚的になることがあり、2つ目に、自らの固有のリズムの発見と育成をしていくことだろうか。

自分自身がリズムの乱れたこの世界の中の一人の人間として生きているという自覚。そうした自覚を持ちながら、絶えず自分のリズムとは何であるかを考え、絶えずそれを大切にしていこうと思う。フローニンゲン:2020/6/27(土)19:25

5938. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。今朝は空が曇っていて、朝日を拝むことができない。

今朝からいつものヨガの負荷量を若干上げて、より細胞を活性化させるような流れにしてみた。そのおかげか、心身がより目覚め、今日一日集中力を持って自分の取り組みに従事できそうである。このあたり、季節の変化に応じて、早朝のヨガの負荷量を調節していこうかと思う。

昨日までは気温が高い日が続いていたが、今日から1週間は再び涼しい日々が続く。最高気温は20度前後であり、最低気温は10度前後となる。この位の気温が一番快適である。ここから1週間の気温について考えていると、ふと、今後はもしかしたら、日本に一時帰国するのを春の季節にしてみてもいいかもしれないと思った。過去7年間においてはずっと年末年始に一時帰国しており、昨年から秋に一時帰国し始めた。来年以降は春の季節に一時帰国することも考えてみよう。日本の春をもう9年近く味わっていない。そんなことをふと思った。

昨日は少しリラックスした時間を設けており、創作活動に充てる時間をいつもより減らしていた。休息の1日があったおかげで、今日からまた新たな気分で創作活動に取り組めそうである。今日も創作活動と読書を起点にし、明日のオンラインミーティングに向けた準備をしておきたい。

今朝方の夢。夢の中で私は、河原にいた。そこは丘のように盛り上がっている河川敷であり、そこで私は3人の見知らぬ人たちとリフティングをして遊んでいた。最初私は、3人はあまりリフティングが上手そうに思えなかったのだが、いざ遊び始めてみると、彼らの技術は高いことに気づいた。誰一人としてボールを落とさず、次の人にボールを渡し、それがしばらく続いた。最後は、3人のうちの2人がヘディングで一回ずつボールをパスし合い、それを私は眺めていた。

リフティングの遊びが終わった後に、少しばかりキーパー練習をすることになった。最初に私がキーパー役になることにし、3人のうち2人はその場から消えた。残った私たちはお互いに河原の上に座り、私は相手にボールを投げ、それにヘディングをしてもらい、そのボールを私が止めることにした。私は、日本代表の往年の名ゴールキーパーのセービング方法を真似てボールをキャッチしたり、ボールを弾いたりした。そのようなことをしばらくしていると夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、私は夢の中の登場人物ではなく、夢を眺める者だった。私はアメリカ西海岸の巨大なスーパーマーケットにいた。そのスーパーは本当に巨大であり、高さ10メートル近い天井を持つフロアに、棚がいくつも並べられていて、棚の高さも非常に高かった。私はそこで、ある男女が商品を盗む様子を目撃した。カップルの男女のうち、男性が商品をサッと懐に隠した瞬間に、棚の上の方からその男性に呼びかける声がした。そちらの方を見ると、棚の上にさらに別の男性がいて、その男性は盗む瞬間を目撃したので、盗みを働いた男性に注意を促したようだった。

すると、盗みを働いた男性は、渋々商品を元の場所に戻し、その場から消え去った。すると私の体は再び夢の中に入り込み、気がつけばその街の映画館にいた。そこで私は、西海岸時代のルームメイトと一緒に映画を見ていたようだった。そのルームメイトは私よりも15歳以上年上であり、今となっては彼は再婚したらしく、奥さんも映画館にいた。映画を見終えて映画館を出る際に、今回の映画は彼の奥さんが見つけたものだと聞いた。そこで私は彼の奥さんに、”How did you find it?”と尋ねようとしたところ、間違えて“Who did you find it?”と述べてしまったが、2人はネイティブのアメリカ人なので、奥さんはすぐに“How did I find it?”と自ら言葉を訂正してくれた。その質問に答えるよ

りも先に、私たちはすぐに帰りの列車が止まるプラットホームに向かう必要があった。質問に答えるのは乗車してからにし、私たちはまずプラットホームに向かった。

サンフランシスコ行きのBart（西海岸を走る列車）は、プラットホームの1番に到着するとのことだった。見ると、もう列車がプラットホームに止まっていて、乗客が続々と列車の中に乗り込んでいた。どういうわけか、私は2人とはぐれてしまい、2人がどの車両に乗り込んだのかわからず、とりあえずどこかの車両に乗り込んでから2人を探そうと思った。乗り込んだ車両から2つほど進行方向と逆側に進んだところに2人はいた。

元ルームメイトの彼は、私のための席のスペースを確保してくれていたようであり、お礼を述べてそこに座った。そこからは後ろの席の奥さんに話を聞くよりも、まずは斜め向かいに座っている彼の話を聞くことにした。彼がゆっくりと英語を話し始めると、どういうわけか私は目をつぶって彼の英語に耳を傾けていた。その方が彼の言いたいことを理解しやすいと直感的に思ったようだった。目を閉じて彼の話を聞いていると、彼の伝えたいことがまぶたの裏にビジュアルとして浮かんでくるかのようだった。フローニンゲン：2020/6/28（日）07:07

5939. オランダのコロナの状況：今朝方の夢の続きと「喜びの丘」

時刻は午後7時を迎えた。今、鮮やかに光り輝く夕日の姿が見える。

昨日までの2日間は気温が高かったが、今日はとても涼しげな1日だった。明日から1週間は今日と同じぐらいの気温の日が続くようなのでとても過ごしやすそうだ。明日からはまた新たな週が始まり、来週からは7月を迎える。今年も気がつけば折り返しの時期に差し掛かっている。夏から年末にかけてはあっという間かもしれない。夏が終わり、気がつけば秋の一時帰国の日がやってきそうな予感がする。

7月末のアテネ旅行の際に久しぶりにオランダ国内で公共交通機関を利用するため、それについて調べていた。すると、6月1日から公共交通機関を利用する13歳以上の乗客には、非医療用のマスクを着用することが義務付けられていることを知った。注意書きとして、手作りのマスクでもいいと書かれており、それはどこかクリエイティビティを大切にするオランダらしいと思った。

バスや列車の中でマスクを着用していないと、違反者として罰金95ユーロが課せられるそうなので注意が必要だ。これまでは公共交通機関の座席の40%しか利用できなかったが、7/1をもってようやく100%となるようだ。7/1からもマスクの着用は義務付けられるそうだが、公共交通機関が復活することは良い兆しだろう。

オランダは欧州の国の中でも感染者が多い方だったので、ギリシャ政府はオランダを警戒国に分類しており、6月中旬までは入国が制限されていたようだ。引き続き、オランダからやって来た人には検査が要求されているらしく、私がアテネに行く7月末もそうした状況が続いているかもしれない。これまで4回フライトがキャンセルになったのは、おそらくオランダが警戒国に分類されていたからなのだろう。

オランダ国内の感染者状況を本日確かめてみたところ、直近の1ヶ月では随分と感染者の数が減ってきており、国全体として良い方向に向かっていることがわかる。ここからオランダが警戒国から解除されることを祈り、日本に戻る秋の頃には隔離措置が解除されていればと思う。

昼前にふと、今朝方の夢の断片を思い出していた。夢の中で私は、友人か誰かに対して、江戸時代の日本人は身体意識が研ぎ澄まされていたが、明治以降、日本人の身体意識は弱体化してしまったのではないかということを述べていた。その場にいた友人も納得しながら説明を聞いており、追加で2、3質問を投げかけてくれた。そのような夢の場面があった。

その他にも今日は雑多なことを思い出していた。私がJFKU時代に住んでいた街はプレザントヒルという名前であり、これは「喜びの丘」という意味だ。よくよくその意味を考えてみると、それは良い名前だと思う。その街に私は2年半ほど生活をし、文字通りそこで多くの喜びを得た。それが自分の内側で喜びの丘として形成されており、それが今でも自分の内側に残り続けている。それは幸運なことであり、自分にとっての恵みである。

プレザントヒルで過ごしたあの密度の濃い時間を今でも時折思い出す。あの頃は日々日記を書くことはなかったため、その分今このようにして当時を思い返しながら何かを書くことが今後もあるかもしれない。フローニンゲン：2020/6/28（日）19:2

5940. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今、朝日が赤レンガの家々を照らし始めている。朝日の姿を拝むことができるのだが、今朝はとても肌寒い。長袖長ズボンを着ようかと思うほどだ。今の気温は12度であり、今日は19度ほどまでしか気温が上がらない。天気予報を見ると、今日から来週の月曜日まではほとんど同じような気温となる。

今週から7月になろうというのに最高気温が20度に満たない日もある。これが北欧に近いオランダ北部のフローニンゲンの気温であることをすっかり忘れていた。私としては、このくらいの気温が一番快適であるため、少々肌寒さを感じさせてくれるぐらいの気温がしばらく続いてくれればと思う。今日は午前中に1件ほどオンラインミーティングがあり、それまでの時間をまずは創作活動に充てていこう。

今朝方の夢。夢の中で私は、実際に通っていた小学校か中学校のグラウンドにいた。グラウンドのサッカーゴール付近に、数名の友人がいてサッカーの練習をしているようだった。そのうちの1人(KM)がサッカーゴールのクロスバーにボールを手で投げてぶつけ、それをキャッチし、再度バーにボールを投げ、その跳ね返りをヘディングして再びバーに当てるということを繰り返していた。それは何かの課題のようであり、集中力を高く保たないとバーに当てることができず、地面にボールが落ちてしまうようだった。友人はそれを50回連続で行わなければその場から離れることができないと述べていた。それは本当に集中しないとできない芸当のように思われ、彼の苦労が労われた。

彼は50回どころか、最初に手でボールを投げるところからバーに当てられないこともあった。見る見るうちに彼の集中力は落ちていき、やけになり始めている様子が伝わってきた。そこで私が代わりにやってみることを彼に持ちかけ、いざ私がそれを行い始めようと思ったところで、私の体は学校の教室の中にあった。そこはどうやら小学校5年生の時に使っていた教室のようだった。私は教室の後ろにあるランドセル入れの付近に立っていて、数人の友人たちと話をしていた。私は彼らに、最近新しいゲームを購入したことを伝えた。それはポケモンのようなゲームなのだが、キャラクターはモンスターではなくロボットだった。どうやらそのゲームは今から20年以上も前に自分がやっていたゲームの復刻版のようだった。

私はそのゲームのパッケージを友人たちに見せた。そのゲームの定価は1万円ぐらいするのだが、パッケージを見ると、3千円という表記が右上にあり、右下には1千円という表記があった。どうやら9月の段階で3千円まで値下がりしたらしく、私が購入した10月の時点では1千円まで値下がりしたようだった。価格が随分と下がっていることを私は改めて驚いたが、私の隣にいた大学時代のゼミの友人(ER)が、値下げ戦略の妥当性について説明をし始めた。そこで夢の場面が変わった。

最後の場面もまた印象的だった。夢の中で私は、ぬかるんだ山道を歩いていた。山道と言っても周りに木はなく、視界は切り開かれていた。山の頂上まであと少しというところで、突然頂上から物凄い土砂が流れてきた。頂上近くの地面には不思議な穴があり、その穴を隠すような形で蓋がしてあった。しかしその蓋は、穴全てを覆い隠す物ではなく、むしろほとんど隠すことができておらず、何のためにそれがあるのかわからないような物だった。

一緒に山道を登っていた友人曰く、どうやらその穴の下には不思議な生物がいるようだった。私はその生物の顔を見てみたいと思い、蓋を外そうとした時に、再び土砂が頂上から流れてきて、それは轟音を上げながら下に雪崩落ちていった。その様子が圧巻であり、土砂は地表のみならず、山道の形状それすらも変えてしまうほどのものだった。そこで私はハッとした。土砂が流れていった先には、山道を登ってきている他の友人たちがいることに気づいたのである。

私は彼らが無事であるかを確かめるために下に降りていこうと思った。土砂で閉ざされた山道を復旧させる必要があると思い、ちょうど近くに落ちていた杖を拾い、その杖でなんとか道の復旧に当たろうと思った。

山道を降りていくと、下の方から声が聞こえてきた。山道は、先ほど自分が通ったものとは似ても似つかない形に変形しており、景色が随分と異なっていた。ある箇所では土砂崩れによって、山道が完全に塞がれてしまっていた。そこで私は持っていた杖でなんとか道を開こうとした。

すると、土砂崩れの道の横に建っていた西洋風のアパートから、女性の声が聞こえてきた。それはおそらく、小中高時代の友人の声だろうと思われた。彼女曰く、この土砂崩れをなんとかするよりも、もっと下の山道の復旧に当たった方がいいとのことだった。彼女にそう言われ、私はとりあえず土砂の山に小さな抜け道を作り、そこを人が通れるようにして、さらに下に向かって行った。

© YOHEI KATO 2020

すると、土砂の山を抜けた先は、オーストリアの街が広がっていた。より具体的には、そこは街の中の宮廷だった。宮廷のすぐ脇に国立公園があり、その公園を通り抜けていこうとしたところ、杖を持っていたことが怪しまれたのか、公園内にいた警官に声を掛けられた。私は早口で事情を伝えようとした。私が述べた英語は正確だったが、如何せん格好が怪しかったらしく、公園の外にある警察所で事情を聞こうと言われた。私は急いでいたため、それではこの街の外にある軍の司令部まで連れて行って欲しいとお願いした。どうやら私は軍から調査の派遣をされてあの山道を登っていたらしかった。

警官:「あなたは軍の関係者なのですか？」

私:「ええ。ですが厳密にはFBIのコンサルタントです」

そのように私が述べると、その警官は私のことを信じてくれたようであり、軍の司令部まで送り届けてくれた。司令部に到着すると、すぐに私は土砂の状況について説明をした。その時に、アメリカのテレビドラマでFBIの女性幹部の役を務めていた女優とオンラインでミーティングをすることになっており、彼女が今ミーティングに向けて化粧をしている姿が目の前のパソコン画面に映っていた。彼女は化粧をしながら私の話を聞いていた。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2020/6/29(月)06:15